

お互いの姿も見えないほどに照明を落とした室内で、シーツが擦れる音と彼の息遣い、私の甘ったるい声が響く。

二人の仕事が早く終わる第二週の金曜日。この日はいつも、恋人である芳野陽人（よしの はると）さんの家に泊まって、そのまま身体を重ねるのが恒例だった。ただ、この恒例を幾度も繰り返して数か月が経った今でも、私自身は一向に慣れる気配がない。今だって部屋を真っ暗にして、さらに頭からシーツを被った状態でないと恥ずかしさで耐えられないのだ。

「んあ……っ♡」

「っ、苦しくない……？」

「ん、大丈夫……」

私のナカに収まっている彼の熱に身じろぎ声を上げた私に、陽人さんは少し眉を下げて心配そうな顔をする。大丈夫ともう一度答えると、彼は安心したように微笑んで私の頭を撫でた。彼の大きな手の平は暖かく、髪からじんわりと熱が伝

わってくる。「動いてもいい？」という彼の言葉に頷くと、ゆっくりと抽送が再開された。

「あっ……♡は、んんう……♡♡♡」

「はあ……♡可愛い、」

ず、ず、と控えめなピストンが繰り返される度、ナカがわずかに収縮して甘い快感がじんわりと身体の中に広がっていく。気持ち良さに息を吐くと、余計に奥深くに彼が沈み込んだように感じられてふりりと下腹部が震えた。

「ひう、う……♡♡♡」

「……………♡♡」

陽人さんはびくびくと小さく身体を震わせる私の乱れた前髪を指で整えると、そつと額に軽く触れるだけのキスをする。額、目尻、頬と柔らかく啄むようなそれはくすぐったくなるくらいに優しく、嫌でも「大事にされている」と思い知らされるような気持ちになる。

真っ暗な室内の、さらに狭いシーツの中だ。きっと表情なんかわからないとは思っていても、この気持ちが浮足立つような、むずむずとしたくすぐったさが筒抜けになってしまうのではないか。そう考えて、と思わず顔を反らして彼のキスから逃げようとしてしまう。

「……ね、こっち見て？」

「っごめ……んうっ♡」

どこことなく寂しさが滲む彼の声色と頬を撫でる指先の感触に慌てて顔を戻すと、謝罪の言葉を最後まで言い切る前に唇が塞がれてしまう。指先と同じ、口内をゆっくり撫でるような彼の優しい舌の動きに、自然と意識がとろりと蕩けそうになった

彼とのセックスは気持ち良い。痛いことなんて一度もされたことがないし、何かを無理強いされたこともない。いつでも私の身体を最優先にしてくれて、少しでも不安なことがあればこの大きな暖かい手と身体で包み込んでくれる。私が嫌

がることは当然しない。現に私が「恥ずかしいから」と言ったから、動きにくいだろうに室内を暗くしてシーツを被ることも快諾してくれた。私の初めては彼だから他の人と比べることはできないけれど、きっと誰が聞いても羨ましいと思うはずだ。

そう、だから彼とのセックスに不満はない。——不満はない、はずだと思う。

「ッ……ごめんね、そろそろ……っ」

「うんっ、私も……ッ♡ふぁ、あ……っ♡」

少し余裕を欠いたような彼の言葉に応えようと、ピストンがほんの少し激しくなる。彼の陰茎が時折最奥をこつりと叩く度にぞくぞくとナカが反応して、絶頂を迎える準備を始める。どちらともなく「イク、」と呟いたかと思うと、そのまま二人で抱き合って絶頂した。

「ああッ♡……んう、う……♡」

「ツく……♡……ッは、あ……」

はあはあと乱れた息を整えながら、絶頂の余韻にまどろんでいると陽人さんがぎゅうと私を抱きしめる。彼の触り心地の良いふわふわとした明るい茶髪が、私の肩口をくすぐった。

「っはー……、どこか、痛いところない……？」

もう何度目かもわからない、私の体調を気遣う言葉。「大丈夫」と返すと、彼は私を抱きしめたまま、私の鼻先に自分の鼻先を合わせるように顔を近づけてにこりと微笑んだ。真っ暗で見えにくいはずなのに、きっと普段私を可愛がる時と同じ、ぽかぽかと暖かい昼下がりのお日様のような笑顔を浮かべているのだろう。

「——今日も本当に可愛かった。大好きだよ」

「っ、ん……私も、大好き」

「ふふ、嬉しいなあ」

ぎゅむぎゅむと悪戯っぽく笑いながら腕の力を強める彼に、私も思わず笑ってしまう。そうすると陽人さんはさらに嬉しそうに笑って、「後でお風呂に入ったら、またこうしてぎゅーってしながら寝ようね」と囁いた。事後特有の気怠さの中でのじゃれ合いは次第に落ち着いていき、陽人さんの手がまた私の頭を撫でた。

安心感で満たされながら、私は目を閉じる。幸せだ。まるで日向ぼっこをしながら昼寝をしているような、心地良さしかない恋愛。これ以上を望んだらきつと罰が当たる。そのはずだ。そのはずなのに。

どうして、私は「物足りない」なんて思っているのだろう。

彼の手に頭をわずかに擦り付ける。甘えるように、先ほど浮かんだいつもの罰当たりな考えを振り切るように。

翌日、彼とのお泊りから始まったデートは、気になっていた洋食レストランでのディナーを楽しんだのを最後に解散になった。

解散後、期待以上だった煮込みハンバーグのセットとデザートのカキの味、陽人さんとの楽しい会話を思い出しながら帰宅し、シャワーを浴びて一息吐いたところでメッセージアプリの通知音が鳴る。

差出人はさっきまで一緒にいた陽人さんで、【今日も楽しかったね！ 無事に家に着いた？】というメッセージに控えめな絵文字と可愛いスタンプが添えられていた。心配そうにクエスチョンマークを飛ばすデフォルメされた犬のイラストはどことなく彼に似ていて、それが余計に可愛く見えて自然と口角が上がってしまう。

できるだけ彼に可愛いと思ってもらえるようなスタンプを厳選しながら返信する。すると、とんとん拍子で会話が進んでいき、いつの間にか次のお泊りデート

の日程が決まっていた。次は再来週の金曜日に、というメッセージの後にぐっすり眠る犬のスタンプが送られ、私も同じようなスタンプを返信してスマートフォンを置いた。

「再来週の金曜日……ふふ、楽しみ」

スケジュール帳を開き、ピンク色のボールペンで予定を書き込み可愛いシールを貼る。気が向いた時にしか開かないスケジュール帳は、ほかの予定の時にはどうやら気が向いたことはなかったみたいだ。気づけば、彼との予定を示すピンク色の文字とシールが乱舞するかなり気恥ずかしいページばかりになっていた。

テーブルを片付けて浮かれた気分のままベッドに転がって、決まった予定に思いを馳せる。

次のお泊りでは陽人さんと何を食べて、どんな話をしよう。お互い定時で帰れるなら、この前話題になっていた映画をサブスクで一緒に観るのも楽しいかもしれない。二人で美味しいものを食べて、沢山お喋りして、ゆっくり過ごして、そ

れから。……それから、彼とまた、一緒にベッドに。

ここまで考えて、何故か私の胸には、無視しようにもできない小さなささくれのような感情が芽生えた。

彼——芳野陽人と付き合うようになって、すでに1年と半年ほどが経とうとしている。身体を重ねるようになってから、もう何度彼のぬくもりを感じたのか覚えていない。そのはずなのに、私にはどうしても彼に言えないことがあった。我ながら馬鹿馬鹿しいとは思っているのだが、いわゆる「性欲の強さ」についての悩みだった。

彼と付き合いセックスするようになるまで、処女だった私は他者との行為には尻込みしつつも、快樂に対する興味だけは人一倍だった。だから、オナニーも人並みかそれ以上にしていたし、漫画や動画、小説などの性的なコンテンツを楽しむのも好きだった。……それに今だって、度々欲を持て余し対処に困ることも少くない。

だからだろうか、陽人さんとのセックスで多幸感のような満足を得ているのに、行為を重ね、肌を見せる恥ずかしさや彼の体温や慣れるにつれて、だんだん「物足りなさ」を感じるようになり始めた。そしてそれが、私にとっては最大の悩みであり、彼に対する申し訳なさを感じる原因となっていた。

彼が行為の最中に囁いてくれる私を気遣ってくれる言葉や、こんな性欲の強さを隠していながらいつまでも恥ずかしがる私に対する「可愛い」という言葉はとても嬉しくて、囁かれる度にくすぐったい気持ちになる。けれど、その反面不安になってしまう。

もしも、この「可愛い」が「いつまでも不慣れで控えめに感じている私」に向けられたものだとしたら？ ……もしも、私が秘めている欲が彼にバレてしまつたら、同じように「可愛い」と言ってくれるのだろうか？

セックスに物足りなさを感じ始めてからだ。いつの間にか私は、少しずつ彼との身体を重ねる日が来るのが不安になっていた。それは「いつかこの性欲の強さ

がバレるかも」という恐れであり、同時に彼の「可愛い」という言葉に安心したいがためにずっと「性的な行為にいつまでも不慣れな私」を演じているような居心地の悪さでもあった。

ぐるぐると考え続けるのが嫌になって、雑に手繰り寄せた掛け布団を被って目を閉じる。「バレるわけにはいかない」と考える自分と「物足りない」と考える自分。両者をどちらも持て余しながら、私は次に彼の家に泊まりに行く日に思いを馳せた。

「ほんとにごめんね……!! もし眠くなったら先に寝ててもいいから!」
「ううん大丈夫! 気を付けて行ってらっしゃい」

先日約束した、再来週の金曜日の今日。今日も、最寄り駅で待ち合わせて二人

で少し豪華な総菜や食べてみたかったスイーツをテイクアウトして帰宅し、食事とお風呂を済ませソファでゆったりとテレビを眺めていた。

いつもだったら、ここで陽人さんが私を優しく抱き寄せて額や頬から軽いキスを重ね、何となくそういう雰囲気になってからベッドに移動する。

ところが今日は、優しく甘やかされる時間が繰り広げられ、いよいよベッドに、というところで彼の仕事用のスマートフォンに着信音が鳴り響いたのだった。

数分ほど話して通話を切った陽人さんは、「担当している案件にトラブルがあって、今から会社に戻らないといけない」と、トラブルに対する焦りと私への申し訳なさが混ざったような顔で話してくれた。仕事であれば仕方ないことだからと快諾すると、彼はへにやりと眉を下げたまま、私への謝罪と気にせず寛いでいいという旨の言葉を繰り返しながら部屋を出て行ったのだった。

バタバタと慌ただしく会社に向かった彼を玄関先で見送った私は、ふうと息を

吐くと寝室に戻り、スマートフォンを手にもベッドに潜る。しばらくSNSのタイムラインをぼんやり眺めていたが、それにも早々に飽きてしまう。

仕事だから仕方がないと頭で理解していても、陽人さんが出て行ってしまった寝室はがらんと置いていてなんだか落ち着かない。彼の纏っている雰囲気と同じような暖かさのある少し暖色がかった照明も、柔らかな雰囲気の小物で統一された室内も、彼がいないというだけで妙に暗く見えるし、空調は適温のはずなのに少し肌寒さを感じるような気がする。

どこことなく感じる心細さを解消しようとしているのか、一人でいるとどうしても考えてしまう。……今頃、本当だったら彼の腕の中であの温もりを感じているはずだったのに。彼に抱きしめられて、キスをされて、そうしたら優しくベッドに押し倒されて、それから。

「……………もう、最悪」

不意に寂しさとは異なる感情が沸き、じわりと身体の芯に熱が生じた。

ああもう、まただ。彼の香りが充満するシーツの中に潜って変なことを考えていたからだろうか。じくじくと無視できないほどに感じる熱は、私が発情してしまっていることを明らかに示していた。

シーツに包まりながら、もぞもぞと足を動かす。湧いてしまった雑念を振り払うためにしたそれは、シーツや衣服、肌同士が擦れ合う刺激を生むだけでかえって熱を深める結果にしかない。

——彼とのセックスに物足りなさを感じてから、私はその物足りなさを埋めるようにオナニーの回数を増やしていた。最初は、自宅で就寝前に手早く済ませてしまっただけで事足りた。それなのにいつの間にか、自宅での回数が増え、時間が長くなり、そして最近では、この家でも。彼との行為の後、彼がぐっすり眠っているのを確認して行為に及んだこともある。

本当に頭がどうかしていると思いつつ、どうしても止められなかった。最初に「一度だけ」と決めたその行為も、今では自宅でのオナニーと同じように回数を

増やしそうになっている。

そんなはしたないことを繰り返していたからだろう。彼が家にいない今、寂しさを感じる私の気持ちとは裏腹に、欲を持て余した私の体はこの状況を絶好のチャンスだと捉えているようだった。

そんなこととしてはいけない、もし帰ってきたらどうするのかと必死に欲を抑える私の理性に対して、少しずつ強くなっていく欲望が「どうせまだしばらく帰って来ない」「すぐに終わらせれば大丈夫」と甘く誘惑する。

「……少しだけ。1回だけイったら、そのまま寝てしまえば大丈夫」

ああもう、本当に嫌になる。

自分の性欲の強さに半ば嫌悪に近いものを感じながらも、すでに欲で判断力が鈍っていた私はゆっくりと自分の身体に指を這わせた。

「……っん、う……♡」

一人で寝るには広いベッドの上で、ゆっくりと胸や下腹部を指で撫でる。万が

一彼がすぐに帰ってきててもごまかせるように、上のスウェットは着たまま、下は下着のみだ。とにかく1回でも熱を散らせば落ち着くだろうと、少し性急な手付きで服越しに乳首を弱めに引っかけたり、下着のうえから中指でクリトリスを撫でる。片手にはスマートフォンを持ち、興奮しやすくするために私の性癖に合う動画を適当に再生している。

ところが、どれだけ刺激しても、動画の手付きの通りに指を動かしてみても、ほのかな気持ち良さは感じて、も絶頂に押し上げられる気配は一向に訪れない。

「は、あ……ッ♡んん……う……」

早く気持ち良くなりたいたいのになれなくて、すっかり溜まり切ってしまった熱にじれったさまで加わって苛立ちすら感じる。きっと、刺激に集中しきれていないのだろう。今日は隣に彼が寝ていないから、バレる心配はしなくていい反面ずっと心細さを感じている。

そしてその寂しさは、快楽に集中できないだけでなく余計な思考まで連れて来

てしまう。

……彼とのセックスに不満はない。柔らかく暖かい毛布で優しく包まれるような愛情に満ちた情事は、「私にもこんな風に愛される恋愛ができたのか」と今でも信じられない気持ちにすらなる。私のこの欲の強ささえなければ、こんな些末なことを悩む必要もなく、心から彼の愛を受け入れられただろう。

まだるっこしい刺激を繰り返しても一向に訪れない絶頂の気配にさらに焦らされ、雑な手付きでショーツを脱ぐ。片足の中途半端な位置でくると丸まったそれをきちんと外すのも面倒で、そのままむき出しになった場所にもう一度指先を向けた。

「っふ……んう、あッ……♡」

頭では快楽が不足していると感じていても、身体のはうはそうでもないらしい。クリトリスを経由して膣口に指先を添えると、くち、と小さな水音が響いた。

そのまま指ですくい取った愛液をクリトリスに丁寧に塗り込んで、くるくると全体を撫でるように刺激していく。びくりと、足がわずかに震えた。このまま愛撫の刺激に没頭できれば良いのに、どこか冷えてしまっている頭の芯では、また彼とのセックスや、彼自身の欲にまで思いを巡らせようとしてしまう。

もしかしたら陽人さんは、もともと性的な方面では淡泊な性質なのかもしれない。いつものセックスも、どちらかというと欲を満たすためというよりは、愛情表現の一つとされているか……もしくは、私が内心では抱かれないと強く思っているのが伝わっていて、無理をしてくれているのかも。

思えば、私が自分の欲の強さに悩み始めてしばらく経った頃だろうか。最中の彼は態度も私への言葉も触れ方もほとんど変わらないが、それでも一瞬だけ不思議な仕草をすることがある。

例えば、私の顔をじっと見て、ほんの少しだけ眉を寄せて視線をずらしたり、何かを言おうとした開いた口をすぐに閉じてしまったり。

暗闇の中のことだから、見間違いや勘違い、気のせいの可能性もあるだろう。それでも彼のその不思議な変化は、私にはどうしても無視するのが難しかった。クリトリスからじわじわと広がる快楽を無意識に追いかけるように指を動かし続けながらも、冷めた思考は止まらない。もしも、この欲を彼に正直に打ち明けたらどうなるだろうとふと考える。陽人さんは優しいから、少し驚きつつもいつものように私の頭を撫でて受け入れてくれるかもしれない。そう思える程度の信頼を、これまでの年月でお互いに築けているとは思っている。

ただ、万が一、万が一そうでなかったら？ 表面上は受け入れてくれたとしても、内心で彼がどう思うか。……いや、もし表面上ですら拒絶されたり、ましてや軽蔑されたりしたら。あの不思議な仕草が、私との行為の、私への拒否感への予兆である可能性は？

現実的に考えれば、どう考えても悲観しすぎだ。いつそ彼に対しても失礼極まりない被害妄想ですらある。それなのに、どうしてか最悪な妄想のほうが、「受

け入れてもらえる」という希望よりも大きく膨らんでいくように感じる。……最低だ、彼の愛情に対して「物足りない」と感じるだけでなく、その上「きつと受け入れてはくれないだろう」と確かめもせず決めつけようとしている自分自身
が。

陽人さんの戸惑う顔、やんわりとした声音での拒絶、私に向けられる軽蔑のこもった視線。一度湧いたら勝手に再生され続ける嫌な想像を、頭を軽く振って振り払う。もうこんなことは止めて寝てしまおうか、でも。

いつのまにか暗転していたスマートフォンを再び手に取る気はすっかり失せてしまったのに、先ほどまでの嫌な想像は私の身体に燻ぶったままの熱を冷ますほどの効果はないらしい。……というより、今は手っ取り早く快樂で止まらない思考をかき消したいという気持ちのほうが強かった。

クリトリスに指を2本当てて少し強めにこね回す度、くちくちと控えめな音が漏れる。早くイきたい、イかなきゃ、イって早くこんな嫌な考えを塗り潰さなき

や。そう思うのに、冷めた脳は一向に絶頂へ連れて行ってはくれないようだ。先ほどの妄想も相まってまた重い自己嫌悪を感じそうになるのを、シーツや枕に残る彼の香りを思い切り吸い込んで無理やり散らした。

——その考えを思いついたのは、本当にたまたまだった。

普段なら、何となく申し訳ない気がして彼のことを考えながら自慰行為に耽ることはできなかったから、いつも全く関係ない漫画や動画を使っていた。けれどこの瞬間は、ベッドに残る彼の残り香と、「彼が帰ってくる前に終わらせなきゃ」という焦り。そして、「嫌な想像を打ち消したい」という思いから、ふと想像してしまったのだ。

例えば、陽人さんがもっと激しく私を抱いたら……？

いつも私を押し倒す時、私の身体を気遣うためにしか動かないあのたくましい腕が私の手首を抑えて、全身を押し潰されるみたいのにのしかかってきたら……。

「ッ……!!♡♡」

ぞわ、と身体の芯が大きく震えた。さっきまで散漫だった思考が収束して、陽人さんに抱かれる……それも現実には経験したことないほどに激しく、強く抱かれる妄想のみに集中していく。

体温が急速に上がっていき、心臓の鼓動が心なしか大きく聞こえる気がする。さっきまで惰性で動かしていた指は全く同じなのに、ほんの少しクリトリスの先端に指が掠めるだけでビリビリと痺れるような快感が下半身全体を襲った。

「んうう……ッ♡♡、あう、ああ……ッ♡♡」

強い快感が走る度に、熱に浮かされた頭はもっと、もっととさらなる快楽を求める。ほんの少し前まで申し訳ないとさえ思っていたのに、本能に従うように彼との情事をより深く想像する。

例えば、片手でクリトリスをぐりぐりと刺激されながらあの長く節くれ立ってごつごつとした指がナカに入ったら。私の好きな場所を、いつもみたいに優しく

撫でるんじゃないくて、圧迫するように指先を押し付けて無遠慮にかき混ぜられたら。

「んああっ♡♡あう、ううゝゝツきもちい、これえ……ッ♡♡」

彼とは似ても似つかない自分の指を2本ナカに突き立てて、想像した通りにGスポットを刺激する。するとクリトリスとは異なるじくじくと疼くような快感が下半身に走って、勝手に腰がへこへこと揺れた。その反応はまるで本当に彼の指だと思い込んでいるようで、我ながら単純すぎて呆れてしまいそうだった。

普段、自慰行為をする時は声を出さない。彼が寝ている隣でこっそりする時は絶対にバレないようにと息すら殺していたし、特に苦もなくできていた。だから、私はもともと声を出す質ではないと思ってすらいたのだ。

それなのに、陽人さんを想像しながら指でクリトリスを苛めたりナカを無造作にかき回したりする度、私の口からはまるで媚びるような甘ったるい声がひっきりなしに上がる。何なら、本物の陽人さんとする時よりも大胆かもしれない。

もっと深く集中したくて、思考の妨げになる情報が入らないように目を閉じる。私が望む陽人さんとの理想のセックスをより細かく、鮮明に妄想できるように。もっと、激しく抱かれるために。

「あんん……ッ♡陽人さん……ッ、陽人さん……ッ♡♡」

彼の名前を呼ぶと、指が深く入ったままの膣口からまた愛液がじわりと滲んだ。名前を呼びながら指でナカを刺激する。第一関節を少し折り曲げるようにするとさらに気持ち良くて、ぐち、ぐち、と濁った水音が大きくなるのも構わずにピストンを繰り返した。

「陽人さんッ♡そこきもちい、もっとお……ッ♡♡」

『ここされるのそんなに好きなの？ 可愛い……♡沢山してあげるね♡』

「うあ、あ……ッ♡嬉しい……ッ♡♡好き、好き……♡♡」

自分の指の動きに合わせて、脳内で作り上げた陽人さんの言葉に応えるようにこくこくと頷いてまた指を激しく動かす。傍から見たらさぞ滑稽だろうと思わな

いでもないけれど、所詮妄想。それに、もっと気持ち良くなれば早くイける。早くイって本人にバレないうちに済ませてしまうための不可抗力でもある。そう言い訳をすれば、一瞬戻りかけた理性はたちまち溶けてしまった。

ナカの刺激に夢中になっておざなりになってしまったクリトリスを空いた指でつまむ。自分でしたことにもかかわらず、妄想の中では陽人さんの悪戯に変換され、「そっちも一緒にするのはダメ」と全くダメとは思っていない、媚びきった声が漏れる。

『ナカとクリ一緒にされるの気持ち良いね♡♡これされたらすぐイっちゃうもんね♡♡』

「うん……ッ♡すぐイっちゃ、イっちゃうからあ……ッ♡♡♡♡」

『いいよ♡いっぱいイって、気持ち良くて頭おかしくなっちゃおうね♡♡』

私の頭の中の陽人さんは、本物の陽人さんと比べるとどことなく意地悪だ。でもそれが逆に興奮材料になって、背筋がぞくぞくと震える。クリトリスとGスポ

ツトを挟むように両手で刺激しているうちに、下腹部がじくりと熱を持ってくる。そろそろ本当にイきそうだと思った私は、ナカに入れた2本の指をできる限り奥まで突き入れてラストスパートをかける。

「ぐう~~~~ッ♡んあぁ……♡もうだめ、イっちゃ……ッ♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅと、聞くに堪えないはしたない音が部屋中に響く。早くイきたい、もっと、もっと、陽人さん……っ♡♡

「陽人さん……ッ♡もっと♡もっと♡陽人さん、陽人さん……ッ♡♡」

「——もっと、なぁに？」

いつもと同じ、私を甘やかす甘い声。けれど決して今聞こえるはずのない声に、ぴた、と時間が止まったように私の動きが止まる。

「え、」と勝手に漏れた私の声はさっきまでの嬌声に比べるとあまりにも小さ

くて、ほとんど吐息と変わらなかった。

ぎゅっと閉じたままだった目を恐る恐る開けると、私が目を開けるのを今かと待っていたような至近距離に陽人さんの整った顔があった。私が寝そべっているマットレスに頬杖をつくようにして床にゆったりと座っていた彼は、いつからそうしていたのだろう。そのあまりの近さに、いつの間にか帰ってきていたことだけでなく、こんなに近い距離にずっといたのに気付かないなんて、どこか他人事のような感想が湧いて、ついでじわじわと四肢の末端から冷えていくような緊張感が走る。

……いつから、どこから見ていた？
——私はさっきまで、何を口走りながら何をしていた？

終わった、という感情とともに、さっきまで全身が汗ばむほどだった熱が一気に引いて、全身の体温がさらに下がっていく感覚。興奮とは違う汗がじわりと滲んで、何かに握りこまれたように胃が重く固くなり、強張っていくのがわかる。

早く何か言わなきゃ、無駄でも何か弁明を、と思うのに声が出ない。

恐らく、私の顔は誰が見ても真っ青になっていただろう。声にならない声を上げながら無意味にぱくぱくと唇を開閉させる私に陽人さんはわずかに目尻を緩ませると、その手をゆっくりと私の頭に置いた。一瞬だけビクリと身体が跳ねたが、彼の手はいつものように優しく私の髪を、頭を撫でるだけだった。

……引いて、ない？

彼のいつもの微笑み、いつもの優しい手付きに、ガチガチに固まっていた身体が少しほどける。こんな姿を見られたのにどうして、と疑問を抱いたのもつかの間、いつも通りの少し低くて、耳に心地良い優しい声が耳元で響いた。

「……ごめんね。急に声かけちゃったからびっくりしたかな……でもこのままだと君も辛いだろうから、1回イっちゃおうか」

「……………え、？ ……あ、あ……………っ!?!♡」